

すみ い 住井すゑ

自由と平等を訴えた女流作家 牛久市



(牛久市提供)

明治 35 年 (1902) - 平成 9 年 (1997)。奈良県生まれ。小学校卒業後、田原本技芸女学校に入学するが中退。その後、小学校教員資格検定試験に合格。この頃から短文や俳句を雑誌に投稿し、しばしば掲載される。17 歳で出版社に採用されるが、女性社員への給与差別に抗議して退社。やがて、農民解放を目指した農民文学者・犬田卯と結婚。昭和 10 年 (1935)、夫の郷里である稲敷郡牛久村〔牛久市〕に転居する。夫の死後、56 歳で『橋のない川』の執筆を開始。昭和 34 年 (1959) から雑誌に掲載され、同 36 年 (1961) に第 1 部を出版。奈良盆地に生まれ育った少年の苦難と成長を描く。いったん完結するが、平成 4 年 (1992) に第 7 部を出版する。自由と平等を求めて差別と闘う物語は、ロングセラーとなり、映画化される。

住井すゑは、奈良県の農家に生まれました。大きな屋敷構えの裕福な旧家であり、副業として大和木綿の製造業も行っていました。すゑが小学校に通っていたころ、先生はすゑを「さん」付けで呼ぶのに、他の子に対しては呼び捨てでした。

(なぜ私は「さん」付けなの？ 学校は勉強するところなのに、家が裕福かどうかで呼び方が変わるなんて。どうしてそんなことで差別があるのだろう。)

すゑは、この時初めて、世の中にある差別ということを実感しました。六人兄弟の末っ子だったすゑは、大阪へ見習い奉公に出ていた一番下の兄から子ども雑誌を送ってもらいました。すゑの文学への情熱はこのころから生まれました。

大正 8 年 (1919)、すゑが 17 歳の時、東京の出版社の女性記者に採用され、上京しました。しかし、女性社員への待遇の差別を感じ、わずか 1 年で退社しました。

(どうして世の中には差別が存在するのだろう。人は、もともと皆平等なはずなのに。)

以後、童話を執筆して生計を立てていたすゑは、世の中の差別と闘いながらも、決して文学に対する情熱は失いませんでした。

大正 10 年 (1921)、すゑは、農民文学者であった犬田卯と結婚しました。当時、犬田は、『農民』という雑誌を発行していました。文学運動を通して農民解放を目指しましたが、度重なる発行禁止、罰金処分を受けてしまいます。

すゑは、童話や少女小説を書き、その原稿料で生活を支えていましたが、生活はたいへん苦しいものでした。昭和 10 年 (1935)、二人は四人の子どもとともに、犬



すゑの遺品 (牛久市提供)

田の郷里である牛久村城中〔牛久市城中町〕に移りました。そして、農業をしながら、
文筆活動を続け、誰とでも分けへだてなく付き合いしました。ところが、世の中にはまだ
差別があったのです。

(家が裕福か貧しいかといったことや、男か女かといったことなどで、なぜ差別がある
のだろう。私の子どもころにも差別があった。よし、私には文学がある。このことを
書いて世の中の人々に訴えよう。)

差別と闘おうとするすゑの気持ちは、次第に大きくなっていきました。昭和33年
(1958)、56歳のすゑは、長年の思いをこめて、『橋のない川』を書き始めました。そして、
同36年(1961)、第一部を出版しました。すゑは、この作品で、奈良盆地に生まれ育っ
た少年の苦難と成長を描きました。第六部まで書き続けました。この時、すでに原稿用
紙5,000枚にも及んでいたといわれています。すゑが71歳の時でした。

さらに平成4年(1992)、90歳の時、第七部を出版しました。この作品は、シリーズ全
体で830万部のロングセラーとなり、映画にもなりました。

(これほど書いても差別の問題は終わっていない。この先、いったい私に何ができるだ
ろう。)

すゑは、「人は本来、自由で平等である。」と訴え続けました。そして、『橋のない川』
の第八部の出版を目指し、執念を燃やしていましたが、95歳で亡くなりました。

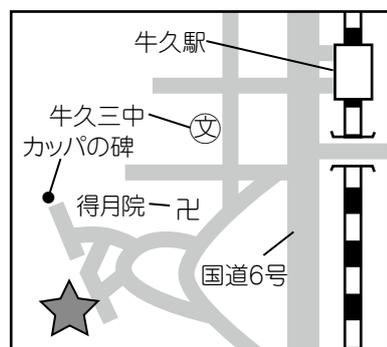
ゆかりのスポットに行ってみよう

抱樸舎

所在地 牛久市城中町77

内 容 すゑが昭和10年(1935)に移り住み、農業をしながら文筆活動を続けた
活動拠点です。

(一般公開に向け整備中のため、詳細は牛久市教育委員会へお問合せくだ
さい。)



おもな 参考文献

『常陽藝文275号』(常陽藝文センター・2006)

『20世紀茨城の群像』(茨城新聞社・1999)